

課題図書リスト

☆図書は、学校図書館や公立図書館で借りるか、書店などにおいて各自で入手してください☆

【履修モデル名】担当教員名

(※各教員の紹介する図書の内容は必ずしも履修モデルと関係があるものばかりではありませんので、一つの履修モデルに拘ることなく選んでください。)

【生活心理】藤木 晶子

- 松井 豊 『高校生のための心理学』大日本図書 2000年 950円
神谷 美恵子 『人間を見つめて』河出書房新社 2014年 760円
河合 隼雄 『こころの処方箋』新潮文庫 1992年 400円
藤田 紘一郎 『こころの免疫学』新潮選書 2011年 1100円

【生活文化】風戸 真理

- 井上 靖 『おろしや国酔夢譚』文春文庫 2014年 778円
菅原 和孝編 『フィールドワークへの挑戦 〈実践〉人類学入門』世界思想社 2006年 2484円
佐藤知久・比嘉夏子・梶丸岳編 『世界の手触り フィールド哲学入門』ナカニシヤ出版 2015年 2808円

【生活福祉】藤原 里佐

- 杉山 春 『ルポ 虐待—大阪二児置き去り死事件』ちくま新書 2013年 840円
杉山 春 『ネグレクト—真奈ちゃんは何で死んだ』小学館文庫 2007年 552円
阿部 彩 『弱者の居場所がない社会—貧困・格差と社会的摂取』講談社現代新書 2011年 740円
河合克義 『老人に冷たい国・日本—「貧困と社会的孤立の現実」』光文社新書 2015年 760円

【経済・経営】山本 慎平

- 朝日新聞経済部 『電気料金はなぜ上がるのか』岩波新書 2013年 756円
正田 彬 『消費者の権利 新版』岩波新書 2010年 756円
松浦 由美子 『O2O、ビックデータでお客様を呼び込め!』平凡社新書 2013年 798円
吉岡 秀子 『コンビニだけが、なぜ強い?』朝日新書 2012年 819円
塩野 誠 『20代のための「キャリア」と「仕事」入門』講談社現代新書 2013年 777円

【情報システム】内山 智

- 吉野 源三郎 『君たちはどう生きるか』岩波文庫 1982年 903円
パオロ・マツァリーノ 『つつこみ力』ちくま新書・筑摩書房 2007年 735円
デカルト著/谷川多佳子訳 『方法序説』岩波文庫 1997年 483円
樋口 裕一 『ホンモノの思考力—口ぐせで鍛える論理の技術』集英社新書 2003年 693円
黒川 利明 『ソフトウェア入門』岩波新書 2004年 777円

【住居・インテリアデザイン】遠藤 太郎

- 手塚 貴晴+手塚由比 『気持ちのいい家』清流出版 2005年 1575円
越後 島研一 『ル・コルビュジエを見る:20世紀最高の建築家、創造の軌跡』中公新書 2007年 798円
伊東 豊雄 『あの日からの建築』集英社新書 2012年 700円
芦原 義信 『街並みの美学』岩波現代文庫 2001年 1100円
古市 徹雄 『世界遺産の建築を見よう』岩波ジュニア新書 2007年 980円

【クリエイティブ・デザイン】川部 大輔

- 水野 学 『アイデアの接着剤』朝日文庫 2014年 648円
佐藤 雅彦 『考えの整頓』暮らしの手帖社 2011年 1680円
小林 章 『フォントのふしぎ—ブランドのロゴはなぜ高そうに見えるのか?』美術出版社 2011年 2,200円

以上

読解力を高める本の読み方

本の探し方

内容に興味を持たない本は、どうしても読み切ることは難しい。タイトルが面白そうだというだけで本を選ぶと、内容が期待していたものと違ってびっくりしたという経験は誰にでもある。そこで、本を選ぶときは、実際にその本を手にとってみると良い。すぐに結論を知りたいければ、最初にあとがきを読むという方法もある。全体の内容は、目次を見るとおおよそ想像がつく。そして、はじめから数ページ読んで、気に入ったらそれに決めるとよい。

ネットで検索して他人の書評を参考にするのも良いが、可能ならば図書館や書店に行って、本棚から本を探して欲しい。推薦図書リストの本のとなりに、あなたの興味を引く本が並んでいるかもしれない。そういうふうにして、読書の幅を広げて欲しいからである。

本の読み方

「読書百遍意自ら通ず」といって、難しい本でも何度も繰り返して読めば、その意味が自然にわかってくるものと言われる。しかし、多くの人々はただ単になんども読むのではなく、工夫して読むことで読解力を高めてきた。もっとも代表的な方法は、線を引きながら読むことであろう。

著者が言わんとすること、すなわち著者にとって大事なことが書かれているところに線を引いておくのである。すると、要約を作成するときは、その線を引いたところを拾い上げてまとめていけばよい。

また、自分が面白いとか、大事であると思ったところにも線を引いて印を付けておく。これは、さっきとは違った線、たとえば波線にして区別できるようにしておくとうまいだろう。すると、波線の部分を拾い上げて、なぜそれが面白いとか大事だと思ったのかという理由を書けば、感想文ができあがる。

以下に線の引き方の例を紹介しよう：

- 梅棹忠夫『知的生産の技術』岩波新書 青版722（岩波書店、1969）pp. 107-8.
「2B の鉛筆で、かなりふとい線を、くろぐろと入れる。電車のなかでもどこでも、やわらかい鉛筆はつかいやすいし、この線の色は、あとからさがすのに便利だからである。」
- 齋藤 孝『読書力』岩波新書 新赤版801（岩波書店、2002）p. 140.
「私は自分が線を引くときには、三色ボールペンで色分けして引いている。青と赤が客観的な要約で、緑が主観的に「おもしろい」と思ったところだ。青は、「まあ大事」という程度のところに引き、赤は、本の主旨からして「すごく大事」と考えるところに引く。赤だけ進めば、本の基本的な要旨は取れるように引く。赤をいきなり引こうとすると、緊張してなかなか引きにくいので、青を引きながらおおよその要旨やあらすじをつかんでいく。そして、その中から最重要のものを見つけるという順序でやると効率がいい。」

線を引いて読むことが許されるのは自分の本だけあって、図書館で借りた本には線を引くことはできない。では、そういった場合はどうすればよいかというと、線を引く代わりに、付箋を貼るか、ノートに書き写すことになる。付箋を貼った場合は、返却前にすべて剥がさなければならないし、ノートに書き写すとなると机がないと読めないのが不便である。そういった不便が嫌なら、やはり自分の本を購入するのが一番である。